

## 《書評》

伊藤里和 著

## 『夢想の深遠 夢野久作論』

成城大学院博士課程後期 横田彩花

本書は、成城大学文芸学部国文学科平成一三年度卒業の伊藤里和氏の一冊目の著書となる。

初めてこの本を手にとった時、「夢想の深遠」という言葉に、著書である伊藤里和氏の夢野久作論の全てに通ずる想いが詰まっているのではないかと強く感じた。それと同時に、本書を読み上げる際に最も注目すべき点は「夢想」（あるいは「空想」・「想像」・さらには「虚構」）であると印象づけられたのだ。

「第一章 童話 ― 教訓童話から『大人のお伽話』まで」では、「怪奇幻想の探偵小説家」である夢野久作の、しばしば忘れられがちな「童話作家」としての一面を扱っている。

探偵小説家としてのデビューを飾るまで久作が発表した数多くの童話は、余技的なものと位置づけられ、注目される機会は少ない。エロ・グロ・ナンセンス全盛期の探偵小説家が、子供向けの童話を書いていたこと自体はめずらしくないが、久作は其中でもとりわけ長い期間に涉って、多数の作品を

発表している点で特筆に値すると伊藤氏は言う。「探偵小説つてものは大人のお伽話に過ぎない」という久作の言葉からは、確かに氏の記している様に、童話と探偵小説の創作にあたり同等の意識を以ってしていたことが理解される。

「第二章『白髪小僧』― 連なり合う空想」では、『白髪小僧』という作品が、夢野久作の後の作家人生において重要な役割を担っているという主張を提示し、その根拠を先行研究の見解などを交えながら、展開している。『白髪小僧』を「未完の失敗作」としてそのまま受け取ってしまうか、あるいは「未完の失敗作」であるが故に評価できるとするか両極端な見解が存在する中で、氏は無論後者を支持するものと理解した。

ここで氏は中島河太郎氏、西原和海

氏、四方田犬彦氏、川崎賢子氏らの見解を紹介した後、「これらの言及は、本作が久作の創作活動上、等閑視できない問題を抱えた作品であることを示している」としている。はじめ筆者は他者の見解を連ねてこのように論じるには少々説得力が弱いのではなかろうかと感じもしたが、しかしそこはあくまでも、氏の自論への導入部なのであった。物語の構造上の特徴を皮切りに、『白髪小僧』に内在されている、注目されるべき諸点を丁寧に取り上げている。

途中、「一つ一つの世界が奔放に枠を飛び越えて関連する事によって、あるひとつの大きな物語が立ち現れてくる」と述べられており、「あるひとつ」の物語とはどのようなものかと疑問が生まれたが、最終的には氏の主張したところの『現実』と『夢』の混在

と一体化、部分が重なり合い渾然一体に融合する世界」なのであると解釈できた。

後の章にも登場する『ドグラ・マグラ』との比較があるのだが、『白髪小僧』の「円環を閉じない結末」そして『ドグラ・マグラ』の「円環」が完了している結末と注目すべき相違点が既に登場しており、第六章『ドグラ・マグラ』には随分と入りやすい印象を受けた。「円環を閉じない結末」こそ『白髪小僧』には必要であり、久作にとって「空想」とは作品の枠を越え、作家自身にも創作の信念として深く根付いたことがこの作品の価値であると理解できた。

「第三章『猟奇歌』——虚構を詠う〈猟奇〉」では、「猟奇歌」を取り上げ、その「独自性」について氏は論じている。ジャンル上未だ明確な位置づけが

行われていないという「猟奇歌」の先行研究は大変少ないという主張を裏付けるかのように、この章では先行研究はほとんど使用されておらず、氏独自の見解が披瀝されているわけだが、とりわけ〈猟奇〉という言葉の認識の違いはとても興味深い。

まず、当時の〈猟奇〉という言葉の認識は現在とはかけ離れている。『エロ・グロ・ナンセンス』とほぼ同義語であり、好奇を求める心理を満足させる新しい・珍しいものに対して使用」されていたというのは現在一般に用いられている言葉の意味との違いに驚きを隠せない。

ここで更に驚かされるのは久作にとつての〈猟奇〉という言葉が、当時の人々の解釈あるいは現在の我々の解釈のどちらにも属さない「独自性」を持っていることである。久作にとつての

「獵奇」とは「自他の区別を取払い、同一・一体のものと捉えようとする、自我融合ともいべき視点に立った無私の感覚」であった。確かに氏が提示した短歌は久作の実体験ではなく、他者の視点で詠まれたものであり、これが「獵奇」と虚構を結びつける所以であると氏は述べている。

「初期の短歌を実名で発表しているのに対し、『獵奇歌』は、小説の際と同じ筆名を使用していることにも表れている」という点を断言してしまうのは筆者ならば躊躇されるが、それでも「獵奇歌」が「小説のもととなるイメージを作る上で大きな役割を担った」ことや、「創作活動の本質に関わるものと成り得た要因」であるということには首肯できるのであった。

「第四章『瓶詰地獄』—想像を孕む空隙」では久作が探偵小説を創作する

際に最も意識していた点（それがつまりは読者にとっても注目点となるのだが）を『瓶詰地獄』を題材として考察している。まずはどこから発想を持つてくるか、であるがそれは氏が取り上げているように久作自身も述べているところに答えがある。

久作は「探偵小説は日常到る処に在る。諸君が其処で呼吸して居ることが既に驚くべきミステリーであり、トリックであり、スリルでなければならぬ」と述べており、氏はこれを「ごく日常的な所から生まれる発想を重視して探偵小説の創作を行う姿勢」とまとめている。他にも注目すべき点として「決定不可能性」と「到達不可能性」という二つを挙げている。これを氏は「物語に予め用意されていない不確実な点、決定不可能性が含まれているということでもある。個別の事象の間に

ある空隙は複数の物語の可能性あるいは可能性を生みだし、一つの解答に辿りつかないよう攪乱する効果がある」と説明している。

この章では副題に「想像を孕む空隙」とあるのだが、これまでの章より、些かその「想像」との関連性が薄まるように感じた。久作自身が述べているように、「探偵小説は日常到る処に在る」と土台を「日常」あるいは現実を持つて来ているので、どうも「日常」に目を向けさせられてしまう。もちろん、氏自身も「久作は『日常到る処』に『探偵小説』へと通じる想像を見出していた」との見解を述べているのだが、そうすると余計に、ではなぜ氏は「日常」よりも「想像」に目を向けているのだろうか、とのささやかな疑問が湧いたことを付言しておく。

「第五章『木魂』—魂・線路・語り」

では、氏が代表作に匹敵する特徴的な傾向があるものとして同作に言及し、「木魂」を取り扱っている。久作作品ならではの特殊性を探っていくという展開の中で、〈木魂〉のモチーフには民間伝承における怪異へと通じる土俗的な要素が込められていることや、関東大震災による影響で「科学への懷疑」を取り上げているのだが、果たしてこれは「久作作品ならではの特殊性」なのだろうか。

民間伝承や「科学への懷疑」というものは多少なりとも他の作家との間に共有されているものではないかと考える。また氏は久作の特徴とは「空想」「想像」であるとしていたが、この二つの特殊性に関しては必ずしも、それは当てはまらないのではないだろうか。民間伝承を「想像」と捉えるか「現実」と捉えるかは難しいところだが、

代々伝承されて来たという事実を考えると「日常」的に伝承が行われていたと考える事も可能ではないだろうか。さらに関東大震災に至って、当時の人々にとって、これは決して目をそらす事のできない「現実」ではなからうか。

「不可思議現象を天狗といった怪異の仕業とは明確にせず、科学的現象とも捉えうる可能性を残している」という点は確かに前章で述べた通りの「決定不可能性」と合致する。氏の語るのに対して氏なりの見解を訊いてみたと思う。

「第六章『ドグラ・マグラ』Ⅰ―〈時間〉と「第七章『ドグラ・マグラ』Ⅱ―〈心理遺伝〉」では第二章で『白髪小僧』との比較により予告・紹介された『ドグラ・マグラ』を〈時間〉と〈心理遺伝〉という二つの観点

から分析している。第二章で氏が述べたように「白髪小僧」の「円環を閉じない結末」と逆の「物語の始めは終わりと繋がって円環を成すのだという」〈円環説〉が『ドグラ・マグラ』の定説であるが、ここで氏は『ドグラ・マグラ』を「白髪小僧」と同様に「円環を閉じない結末」であると新しい読み方を提示している。

次に『ドグラ・マグラ』に登場する「心理遺伝」という想像上の学説とユング心理学の「個人的無意識」と「集合的無意識」を検証する。それらはほとんど酷似しているが、氏の調べたところに拠ると久作自身『ドグラ・マグラ』執筆中には、ユングの名前すら知らず、真似ることは不可能であるとする。そうなることこの「心理遺伝」という架空の学説がどのような想像を辿り生まれたのだろうか。氏はこの問いに

対して「儒教・仏教・キリスト教」の「それぞれ異なる教義」も「共通する意思の下に結びついている」とし、それが「心理遺伝」であるという大変興味深い見解を述べている。『ドグラ・マグラ』の「一つの解答へと」導くことのない結末は、氏の論ずる第四章において強く主張された「決定不可能性」であると理解された。

最初に述べたように、「夢想」という言葉を強く意識し、氏の論を解釈しつつ読み進めていけばいく程に、あるいは夢野久作の捉えた彼なりの「現実」というものがあったのではと、より一層興味を掻き立てられたことであった。

（よこた・あやか 成城大学院博士課程後期）